

病害虫発生予察情報(5月予報)

平成 29 年 4 月 26 日
静岡県病害虫防除所長

1. 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (5月の県平均平年値)	予報の根拠
イネ	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	縞葉枯病発生量：やや少 ヒメトビウンカ発生量：少	昨年8月発生量 縞葉枯病：並(±) ヒメトビウンカ：少(-) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～少ない(+)
コムギ	赤かび病	発生量：少 (発病穂率 4.9%)	4月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：低い(±) 降水量：並～少ない(-)
ジャガイモ	疫病	発生量：少 (発病株率 9.9%)	4月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～少ない(-)
	ジャガイモガ	発生量：並 (寄生株率 0.17%)	4月中旬発生量：並(±)(発生なし) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～少ない(+)
	アブラムシ類	発生量：多 (寄生株率 20.7%)	4月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～少ない(+)
チャ	チャハマキ	発生量：やや多 (寄生虫数 0.9 頭/1.25 m ²) 発生時期：遅い	4月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～少ない(±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：やや少 (寄生虫数 0.2 頭/1.25 m ²) 発生時期：遅い	4月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～少ない(±)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：少 (叩き落とし虫数 11.3 頭/4 か所)	4月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～少ない(±)
	チャノミドリ ヒメヨコバイ	発生量：やや多 (叩き落とし虫数 1.4 頭/4 か所)	4月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～少ない(±)
	カンザワハダニ	発生量：少 (摘採面寄生葉率 3.7%)	4月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～少ない(±)
	クワシロ カイガラムシ	発生量：少 発生時期：やや遅い	4月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～少ない(±)

作物名	病害虫名	予報 (5月の県平均平年値)	予報の根拠
ウンシュウミカン	かいよう病	発生量：少 (発病度 0.1)	4月中下旬発生量：少(－) 気象予報：気温：低い(±) 降水量：並～少ない(－)
中晩柑類	かいよう病	発生量：少 (発病度 0.05)	4月中下旬発生量：少(－) 気象予報：気温：低い(±) 降水量：並～少ない(－)
ウメ・モモ・ビワ・ナシ	果樹カメムシ類	発生量：並～やや少ない	越冬量：やや少(－) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～少ない(±)
キウイフルーツ	かいよう病	発生量：並	4月中下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：低い(+) 降水量：並～少ない(－)
キク (露地)	白さび病	発生量：少 (発病株率 5.1%)	昨年10月発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：低い(+) 降水量：並～少ない(－)
	黒斑・褐斑病	発生量：少 (発病株率 8.7%)	昨年10月発生量：並(±) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～少ない(－)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県のごく過去 10 年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(－)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

2. 予報の根拠と防除対策

【イネ】

●縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

予報の根拠

- ・昨年8月の巡回調査では、縞葉枯病の発病は認められなかった（平年0.62%）。
- ・昨年8月の媒介虫ヒメトビウンカの最多寄生虫数の平均は0.6頭/株（平年1.4頭/株）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～少ないため、媒介虫ヒメトビウンカの発生を特には助長しない。
- ・愛知県では3月17日付で本病の発生予察注意報が発表されているため、本県においても発生に注意する。

防除対策

- ・発生地域では縞葉枯病抵抗性品種（例：あいちのかおり SBL）を利用する。
- ・発生地域ではヒメトビウンカ対策として必ず箱処理剤を施用する。

<その他の病害虫>

●苗立枯病、いもち病(苗いもち)、ばか苗病、もみ枯細菌病、イネシンガレセンチュウ

防除対策

種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）

- ・自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
- ・県病害虫防除基準に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
- ・厚播きは発病を助長するため、適正な種子量を守る。

育苗管理

- ・出芽期は30℃以上、緑化期以降は25℃以上の高温とならないよう、できるだけ温度管理に注意する。
- ・シルバーポリシートによる育苗では高温多湿になりやすいため、換気を行い温湿度管理に注意する。
- ・本県ではMBI-D剤（「ウィン」、「デラウス」または「アチーブ」を含む剤）耐性いもち病菌が発生している。また、近年、他県ではQoI剤（「アミスター」または「嵐」を含む剤）耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念される。耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。（詳細は県病害虫防除基準の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料について」の項を参照）

●イネミズゾウムシ

防除対策

- ・昨年6月の巡回調査では、イネミズゾウムシによる被害株率は6.0%（平年8.0%）と平年より少なかった。常発地では箱処理剤を施用する。

●イネドロオイムシ

防除対策

- ・主に東部高冷地で発生がみられる。昨年7月の東部高冷地における被害株率は4.8%（平年23.6%）と平年より少なかったが、一部ほ場で多発した。常発地では箱処理剤を施用する。

●スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)

防除対策

- ・例年5月以降に活動を開始し、移植後の苗を食害するため、普通期栽培水田では、移植後の薬剤処理を実施する。また、移植後2～3週間は食害を抑制するため、浅水管理（4 cm 以下）に努める。周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬している可能性があるため、水路から泥を上げて貝を破砕する。なお、スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。県内の分布は徐々に拡大している。

【コムギ】

<生育の概況>

生育は平年より1～2週間程度、遅れている。

●赤かび病

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～少ないため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・開花期～乳熟期にかけて感染する。防除適期は開花期頃である。コムギの生育状況をよく確認し、適期と考えられる時期に防除を実施する。
- ・予報では少としたが、4月に発生が少なくても、降雨によって多発することがあるため注意する。
- ・感染に好適な条件が続く場合には、予防散布に努める。

<その他の病害虫>

●うどんこ病

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では発病株率12.4%（平年1.7%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～少ないため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・穂揃期～開花期の止葉の発病葉率が50%を超えると、減収などの実質的被害が生じる。ほ場内の発生に注意し、発病葉率50%を超えると見込まれる場合は薬剤防除を実施する。
- ・巡回調査地点の中では浅羽地区で特に発生が多かったため、発生が上位葉へ拡大していないか注意する。
- ・風通しや日当たりの悪いほ場で発生しやすいことから、密植を行っている場合は特に注意する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では寄生株率6.4%（平年11.4%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～少ないため、アブラムシ類の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ほ場内の発生に注意し、多発した場合は薬剤により防除する。

【ジャガイモ】

<生育の概況>

トンネル栽培では平年並だが、露地及びマルチ栽培ではやや遅い。

●疫病

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では発生はみられなかった（平年発病株率2.2%）。
- ・1か月予報では、気温が平年より低く、降水量が平年並～少ないため、本病の発生は特に助長されない。
- ・本病は開花期以降、気温が15℃以上で降雨により湿度が高くなると発病しやすい（発病適温18～20℃）。

防除対策

- ・本病は降雨により感染が助長され、発病してからの防除は難しいので、開花期前からの予防散布を必ず行う。
- ・特に前年度に発生がみられたほ場では防除を徹底する。

●ジャガイモガ

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では寄生はみられなかった（平年発生なし）。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より低いため、本種の発生は特に助長されない。

防除対策

- ・葉での被害は少なく目立たないが、塊茎での被害が近年多くなっているため、開花期以降に防除する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、寄生株率は33.7%（平年16.2%）で平年に比べ多かった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より低いため、本種の発生は特に助長されない。

防除対策

- ・5月は気温の上昇とともに発生又は密度の増加が予想されるので、発生に注意し密度の低いうちに防除を行う。なお、ほ場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源となるので、除草を行う。

【チャ】

＜生育の概況＞

茶業研究センターの作況園における新芽の生育は、平年より10日以上遅れている。また、病害虫防除員からの報告では、5～10日遅れている。

●チャハマキ・チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、チャハマキ越冬幼虫数は0.2頭/1.25m²（平年0.11頭/1.25m²）と平年よりやや多く、チャノコカクモンハマキ越冬幼虫数は0.06頭/1.25m²（平年0.08頭/1.25m²）と平年並だった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より低いため、両種幼虫の発生は平年より遅くなり、特に助長されない。

防除対策

- ・平年の防除適期は5月中旬～下旬であるが、地域の予察灯やフェロモントラップの成虫誘殺状況を参考にして防除時期を決定する。また病害虫防除所のホームページでは県内各地の成虫誘殺状況を掲載しているので参考にする。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.34頭/4カ所（平年0.83頭/4カ所）で、平年より少なかった。
- ・1ヶ月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は低いため、本虫の発生は特に助長されない。

防除対策

- ・例年、二番茶生育期から発生が増加するので、萌芽期から開葉期にかけて防除を実施する。5月中に二番茶が萌芽してくるような生育の早い茶園では虫の発生に注意し、被害が出る前に防除を行う。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.28頭/4カ所（平年0.17頭/4カ所）と平年より多かった。
- ・1ヶ月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は低いため、本虫の発生は特に助長されない。

防除対策

- ・例年、二番茶生育期から発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。5月中に二番茶が開葉してくるような生育の早い茶園では虫の発生に注意し、被害が出る前に防除を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、摘採面での寄生葉率は0.8%（平年2.9%）、裾部での寄生葉率は1.3%（平年4.1%）で平年並より少なかった。天敵のカブリダニ類の発生は、平均叩き落とし虫数0.04頭/4カ所（平年0.22頭/4カ所）で平年より少なかった。
- ・1ヶ月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は低いため、本虫の発生は特に助長されない。

防除対策

- ・例年、5月は天敵のカブリダニ類の増加によりハダニの密度抑制が期待される。一番茶摘採後の残葉でのハダニの密度に注意し、密度が高まる前に早めに防除を実施する。

●クワシロカイガラムシ

予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.0%（平年20.7%）で平年より少なかった。
- ・1ヶ月予報では、降水量は平年並〜少ないが、気温は低いため、本虫の発生は特に助長されない。

防除対策

- ・アメダス気温データを用いた牧之原（菊川市：茶業研究センター）の第1世代幼虫の予想ふ化最盛日は、4月24日現在の計算では5月23日（昨年5月16日、平年5月21日）で、ふ化がより遅くなると予想される。
- ・第1世代の幼虫ふ化時期は、第2世代以降に比べ揃うため防除効果が高い。発生が見られる茶園では幼虫のふ化状況を観察し防除を行う。なお、各地の予想ふ化最盛日と防除適期の目安は、防除所ホームページで提供している。

<その他の病害虫>

●チャノサビダニ・チャノナガサビダニ

- ・一番茶摘採残葉や摘採が遅くなった一番茶葉に多発することがある。
- ・雨が少なく乾燥条件が続くと、急激に密度が増加する。著しい被害が発生すると、二番茶芽の生育が抑制されることがあるため、発生が見られたら早めに防除する。

●チャトゲコナジラミ

- ・幼虫で越冬したチャトゲコナジラミは、4月中下旬から5月上旬に羽化して成虫が発生する。
- ・成虫の発生が収まる5月中旬から下旬に、若齢幼虫を対象に裾部を重点的に防除する。また薬剤散布をする前に、裾刈りを行って幼虫密度を下げる。
- ・すす病が発生している生息密度の茶園では、中切り更新を行う。その際、葉が残っていると幼虫が生き残り防除効果が低下するため、裾部の葉も出来る限り刈り払う。

●チャノホソガ

- ・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、適期防除を実施する。なお、成虫の誘殺データについては病害虫防除所ホームページで情報提供している。

●炭疽病

防除対策

- ・3月上中旬の巡回調査では、古葉における平均発病葉数が12.6枚/1.25m²（平年12.2枚）と平年並であった。
- ・感染は新芽の上位3～5枚目くらいまでの新葉に限られる。また、感染には10時間以上の濡れが必要で、新芽の生育期に降雨が続くと発生が多くなる。このため、天候に注意し、二番茶芽の開葉期に防除を実施する。

●もち病

防除対策

- ・昨年7月の巡回調査では、平均発病葉数 4.6 枚/1.25m² (平年 3.5 枚) と平年並であった。
- ・伝染源となる担子胞子の発芽には高い湿度 (99%以上) が必要で、発芽と菌の生育適温は 16~20℃である。多発すると治療剤 (浸透移行剤) でも十分な防除効果が得られなくなるので、茶園をよく観察し、発生初期に防除を徹底する。例年発生がみられる茶園では、二番茶の萌芽~開葉期に予防散布を実施する。なお、耐性菌の発生を防ぐため、DMI 剤の連用は避け、予防剤 (保護剤) と組み合わせて防除する。

●褐色円星病(緑斑症)

- ・4月の巡回調査では、平均発病葉率 38.1% (平年 24.3%) と平年よりやや多く、多発園では新芽の下の古葉が落葉していた。落葉すると茶株が消耗することから、減収や品質の低下を招く。
- ・落葉時 (3~4月) には防除手段がなく、薬剤による防除適期は三番茶または秋芽生育期である。発生状況はこの時期が最もわかりやすいため発生茶園を確認し、適期に防除する。

【ウンシュウミカン】

<生育の概況>

生育は、発芽期が平年より 10 日程度遅い。

●かいよう病

予報の根拠

- ・4月の巡回調査では、発病度は 0.05 (平年値 0.17) で、平年に比べ少ない発生だった。
- ・1か月予報では、気温が平年よりも低く、降水量が平年並~少ないため、本病の発生は特に助長されない。

防除対策

- ・発芽直後から新梢伸長期の降雨により感染が助長されるため、多発園では展葉期に予防散布を行う。

【中晩柑類】

●かいよう病

予報の根拠

- ・4月の巡回調査では、発病度は 0.57 (平年値 0.83) で、平年と比べて少ない発生であった。
- ・1か月予報では、気温が平年よりも低く、降水量が平年並~少ないため、本病の発生は特に助長されない。

防除対策

- ・発芽直後から新梢伸長期の降雨により感染が助長されるため、多発園では展葉期に予防散布を行う。

【ウメ、モモ、ビワ、ナシ】

●カメムシ類(チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ)

予報の根拠

- ・今年1月に行った落葉中の越冬量調査では、チャバネアオカメムシの越冬虫数は0.4頭/m²(年平均越冬虫数0.7頭/m²)とやや低かった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年より低いため、カメムシ類の飛来は平年並～やや少ないと予想される。

防除対策

- ・ほ場での発生状況や、地域の予察灯・フェロモントラップでの誘殺状況に注意し適期に防除する。誘殺データは病虫害防除所ホームページで提供している。

【キウイフルーツ】

●かいよう病

予報の根拠

- ・4月の巡回調査では、1園地で発病葉が確認された。
- ・病原菌の生育適温は10℃～20℃であり、風雨により飛散し気孔や傷口から感染する。1か月予報では、気温は平年よりも低いが、降水量が平年並～少ないため、本病の発生は特に助長されない。

防除対策

- ・細菌病であり、樹体内に一度細菌が侵入してしまうと根本的な治療は難しいため、防除は予防対策が中心となる。
- ・受粉結実後～果実肥大期までにコサイド3000を予防散布する。散布にあたっては、薬害軽減のためクレフノンを加用する。
- ・管理作業によっても感染するため、せん定器具はこまめに消毒する。

【カキ】

<その他の病虫害>

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・アメダスデータを用いたシミュレーションによると、多くのカキ産地では本種第1世代成虫の発生時期は5月16日～20日と予想される。
- ・ほ場での発生状況は、病虫害防除所ホームページに掲載している「チャノキイロアザミウマ発生時期予測」を参考に、第1世代成虫を対象として防除を行う。

【キク(露地)】

●白さび病

予報の根拠

- ・昨年10月の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.04%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より低いが、降水量は平年並～少ないため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・発生ほ場では、罹病性品種を中心に薬剤散布を行う。ただし、薬剤によっては薬害が出やすいので、新しい品種では小規模の試し散布を行う。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●黒斑・褐斑病

予報の根拠

- ・昨年10月の巡回調査では、平均発病株率は11.7%（平年10.1%）と平年並の発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～少ないため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・本病は、潜伏期間が長く発病後の防除では手遅れとなるので、薬剤の予防散布を行う。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・土の上に落ちた被害葉が伝染源となるため、被害葉をほ場に放置しない。
- ・親株が罹病しているとそこから新芽に伝染し、定植してから発病することが多いため、発病が見られる株を親株として用いない。

3. 季節予報

(1) 1か月予報

(東海地方 平成29年4月20日 名古屋地方气象台発表)

【予報期間】 4月22日から5月21日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、平年並または低い確率ともに40%です。2週目は、平年並の確率50%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	40	30	30
1か月	降水量	40	40	20
1か月	日照時間	20	40	40
1週目	気温	40	40	20
2週目	気温	30	50	20
3～4週目	気温	30	40	30

【予報の対象期間】

- 1か月 : 4月22日(土)～5月21日(日)
1週目 : 4月22日(土)～4月28日(金)
2週目 : 4月29日(土)～5月5日(金)
3～4週目 : 5月6日(土)～5月19日(金)

(2) 3か月予報

(東海地方 平成29年3月24日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 4月から6月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。この期間の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

4月 天気は数日の周期で変わるでしょう。平年に比べ晴れの日が多い見込みです。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

5月 天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多い見込みです。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

6月 平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

【気温】

3か月			4月			5月			6月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
20	40	40	30	30	40	20	40	40	20	40	40

【降水量】

3か月			4月			5月			6月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
40	40	20	40	40	20	40	30	30	30	40	30

※参考資料

	平均気温 (°C)			降水量 (mm)		
	4月	5月	6月	4月	5月	6月
浜松	14.7	18.7	22.0	168	191	241
静岡	14.9	18.8	22.0	210	213	293
三島	14.4	18.5	21.9	149	161	228

* 降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※参考資料

1. 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

【問合せ先】 静岡県病害虫防除所

〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>